

# 研究所所報はじめに

総合研究所長 土田英雄

奈良大学総合研究所の所報が、今漸く体裁を整えて公刊できる運びに至ったことは、関係者の一人としてこの上ない喜びである。研究所の正式発足以来3年目にして念願の所報を発行出来たのはむしろ幸運であったかもしれない。これひとえに研究所設立に尽力された柳川委員長・初代所長の水津学長初め研究所の設立・整備・運営に真剣に取り組んで頂いた全学教職員の労苦の賜物であり、また学園当局の心からなる協力のお陰である。

1969年4月文学部だけの単科大学として発足した奈良大学は、1988年4月社会学部・教養部を増設して、総合大学への第一歩を踏み出すとともに、1990年4月全学共同の研究活動機関として総合研究所を発足させた。今この所報の刊行が、奈良大学創立25周年を記念し、大学全体の研究活動を益々充実・発展して行くための重要な契機となることを心から願うものである。

所報創刊号の巻頭を飾る「発刊の辞」は、初代所長として研究所設立の基礎造りをされた水津学長にお願いした。本書掲載の「論文ないし研究ノート・資料」は、研究所発足時に引き継いだ文学部・社会学部の各プロジェクト研究および奈良大学特別助成研究の各担当者が、個人または共同でその成果を発表する場とした。なお研究所発足以来の諸活動の記録を「研究プロジェクトの概要」および「事業報告：文化講座・社会学部公開講座」として、各担当者がその内容を纏めた。また研究所発足の経過は、研究所設立準備委員長として、いろいろ苦勞された柳川教授が「研究所発足に至る経緯」を寄稿し、事務局の担当者が「研究所のあゆみ」を、保存資料に基づいて年表形式で整理した。

奈良大学では、文学部の学科の充実、研究体制の発展と歩調を合わせて、一部教官の間に、かなり早くから研究所設立への期待と要望はあったが、それが具体化したのは、社会学部設立を契機とした全学的な研究所設立準備委員会の設置であった。将来全学的視野に立った研究体制の確立が期待されるが、とりあえず従来の学部の研究プロジェクト・文化講座・公開講座などを研究所主催として引き継ぎ、新たに教養部主体のプロジェクト・教養講座を加えて、全学的な研究所の活動を開始した。また「研究所所報」の発刊という、設立当初の課題に対しても、当座は、従来附属図書館で刊行していた「奈良大学紀要」を研究所の刊行物として引き継いで、組織の体裁を整えた。

しかし研究所の役割として、最も重要な仕事が、所報の刊行であることは自明の理である。大学の「紀要」と「所報」とは本来的にその性格を異にする。時あたかも大学の自己点検・自己評価が重視される時代である。研究機関としての大学が、その研究活動をいっそう向上させるために設置した研究所を、真に充実した存在とするためには、その成果を広く公刊して、その責務に答えるべきであろう。この「所報」が、今後全学教職員の一層の支援と協力によって、「奈良大学総合研究所」の特色を遺憾なく発揮する、ユニークな刊行物として成長し、すでに21号の歴史を持つ従来の「奈良大学紀要」とともに大きく発展することを切望する。